なんぼくしてき

南北市羅

2015

第7号

遺跡コラム

「椰子の実（現代版）」

串山海水浴場

長崎県埋蔵文化財センター

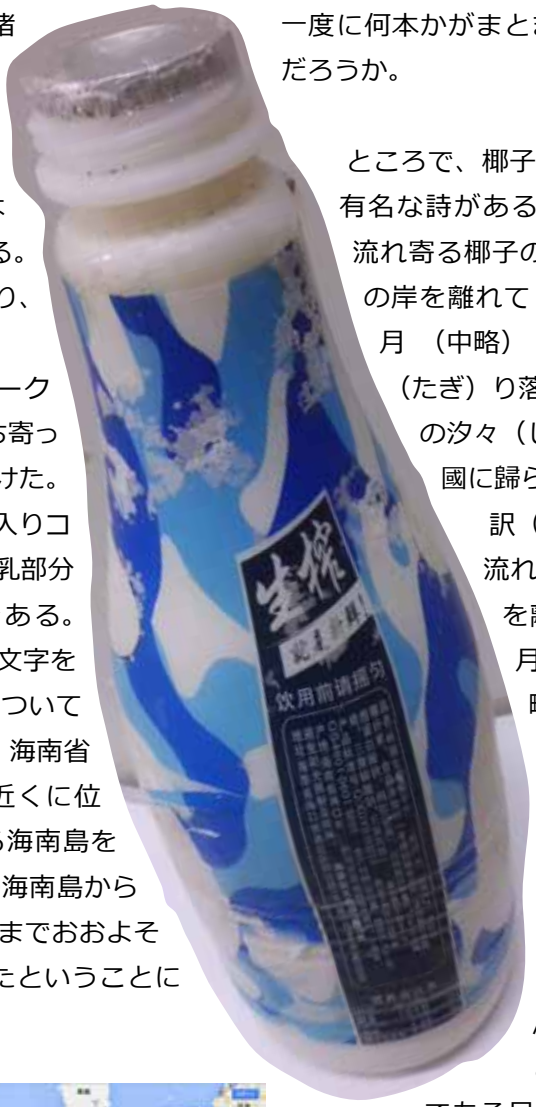
椰子の実（現代版）

長崎県埋蔵文化財センター　調査課　　白石　渓冴（けいご）

壱岐の海はきれいだ。島の西側には、対馬海峡の荒波が削りだした「猿岩」や「鬼の足跡」といった景勝地があり、島の東側には、日本の快水浴場 100 選と日本の渚 100 選に選ばれている筒城浜（つつきはま）をはじめ、きれいなビーチが多くある。島暮らし３年目の筆者に、壱岐の海の魅力を語るには早すぎるが、やはりきれいである。週末はこれらをブラブラと巡り、砂浜を歩いて癒されている。

先日、壱岐の観光地イルカパークの先にある、串山海水浴場に立ち寄ったところ、興味深いものを見つけた。

未開封のプラスチックボトル入りココナツミルク（椰子の実の、胚乳部分の絞り汁。内容量 1.25kg）である。ラベルは劣化が進んでいるが、文字を読むことは十分にでき、産地について「産地：海南省海口市」とある。海南省とは中国の南側、ベトナムの近くに位置し、中国のハワイと呼ばれる海南島を中心とした省である。もしこの海南島から流れ着いたのだとすると、壱岐までおおよそ 2,500km をはるばる流れて来たということになる。



ココヤシの来た道

このココナツミルクのプラスチックボトルは、5 メートルほど離れた位置にもう一本、合わせて２本が流れ着いていた。輸送中の手違いか何かで、一度に何本かがまとまって流されたのではないだろうか。

ところで、椰子の実といえば、島崎藤村の有名な詩がある。「名も知らぬ遠き島より　流れ寄る椰子の實一つ　故郷（ふるさと）の岸を離れて　汝（なれ）はそも波に幾月　（中略）　海の日の沈むを見れば　激（たぎ）り落つ異郷の涙　思ひやる八重の汐々（しほじほ）　いづれの日にか國に歸らむ」

訳（名前も知らない遠い島より流れよる椰子の実が一つ　故郷を離れてお前はいったい何ヶ月波に乗ってきたのか　（中略）　海に日が沈むのを見ると、異郷に暮らす寂しさの涙が溢れ出してくるいつの日にか故郷に帰ろう。）

流れ着いた椰子の実に自分自身を重ね合わせて、故郷を離れて暮らす憂いを詠んでいる。

この詩は、島崎藤村が友人である民俗学者の柳田国男に、愛知県の渥美半島で、漂着した椰子の実を見たことがある、という話を聞いてできたという。

ココナツミルクを拾った筆者も、故郷である飛騨高山を離れてはや１０数年。「異郷の涙」が「激り落つ」ことは、今のところないが、海南島より流れてきたココナツミルクは、現代版「椰子の実」ということになろうか。

さて、ここ壱岐では、おおよそ2000年前の弥生時代版「椰子の実」が出土している。3世紀の末に書かれた魏志倭人伝に記された「一支国の王都」とされる原の辻遺跡において、椰子の実で作ったココヤシ笛がこれまでに2点見つかっているのである。ココヤシの殻を用いた笛で、息を吹き込む吹口と指で押さえて音階を調整する指孔が空けられている。

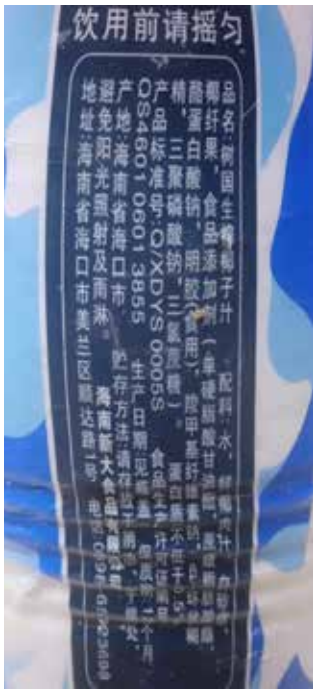
ココヤシは、沖縄本島以北では冬を越すことができないといわれ、壱岐島の自生であることはあり得ず、漂着物であることは間違いない。

ココヤシ笛
（原の辻遺跡出土）

実は、ココヤシの実は北海道の北端を除いてしばしば日本全国の海岸に流れ着く。出土品としては全国の9遺跡から見つかっているという。楽器として加工されたとされる例はこの2点だけであり、非常に珍しい。

このココヤシ笛について、ココヤシの内殻に開いている孔は、カモガイモドキという二枚貝が巣穴を作るためにあけた孔であり、音階を調整する指孔ではないという説もある。

だが、楽器であるにせよ、ないにせよ、このココヤシの殻は原の辻遺跡の生活場所にほど近い溝から出土しているのであり、漂着物を浜辺から持ってきたということは言えるのではないだろうか。



昔から、人々は漂着物を利用し、生活をより豊かにしてきたのである。

では、昔の人にならって、串山海水浴場で拾ったココナツミルク入りプラスチックボトルは、利用（飲用）できないだろうか。注意書きによると、賞味期限は、製造後１２ヶ月。製造年月日が2014.9．15日であるから、期限はやや過ぎている。0から6℃で冷蔵、蓋を開けたら6時間以内に飲むように、などの注意書きがあり、新鮮さを保つことが大事らしい。やはり飲まないほうがよさそうである。椰子の実の生搾り。海南島に行ったら、ぜひ飲んでみたい。

筒城浜海水浴場